環海異聞

三

No. 3.

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

DK
18
.087
1807
Rare
No.3

1909407

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

漂客記聞巻之三

亜哥都蛤

十月十三日ヤコーツカとゆ所へ着
オホーツカより此所にて宿初にて三十日ばかり路
にて着の積り出立仕候処厳寒の節故ほかれ
にお来五十日餘にて着仕候此処ばかり家数凡貳
千軒程もおろんせれ家作り来候ゆへ来造之
石作りも少々に拙者ともハ丸木ニ高組あけ造り之
是ニ家におろんれ宿主より麦餅牛肉ホをあきへ
雑れ給へし

上 瀬ノ 武笠 崎

一 人家ハ木作りなるを石作りも多くハ一度役所と
寺斗なるを
家作りの仕方ハイルコーツカの所ハ見し
一 ちハ九ケ所ハ是
ちの造り様佛社并ち僧の様子ホハイルコー
ツカ者所ニ詳なるを
一 此外ニ四十日余ハ在ル
一 前ニ中上ニ氣ニ傷れ足さしへ腐ゆこしの
當所へ着しし上医者を頼し外料ニ取り様
子見て高甚柄(ツチ)界(サカ)此所を活力ニ高甚様ニ
言語へ出れく者多當いふし事ニて療治

いふしゝをえ中ゝ追ゝえ交ゝ行を此国
ゝ事をケよ上ゝ病ひあなかゝ事とお
えん本をえ行ゝ見れ形を造り結見を放
杖ゝ出行いきしゝ中ゝえのをイルコーツカ
ゝ毎ゝえ当り中ゝ
十一月廿四日ヤフーツカヲ出えしイルコーツカへ
ゝ中ゝ是より大低南の方へ向ひ事旅行信
此度をヤコーツカに止まり拙者方を宿料を
除ひ蔵見仕候

一 月中ゝつきを彼国此里数に事十里十二
里十八里廿里くらひ死ゝ也ゝ行き

一宿ニ澤場者名ハ一ニハ見ふ申ル但
オクヨクニと申候ハ家數三百軒程ツヽ
ハ三ヶ代及も在番ホもおんん申ス家造りハヤコ
しツカ同よふと見へ申ス又ケンしゲンといふ地
見申ス是ハオクヨクニよりハ家數も少ニち
ハ二ケちゆゑにまふにはたらく申ス此候ハイルコ
ツカ百里ゆゑと申ス

一居中ハ發足より雪車ハ家ゆゑ三ヶ馬車
と申ス馬ハ徒場此を近ハよりハ四丈或ひハ
六丈所申ス

一此居中ケルコしツカ小三ヶ大川引ツヽき川筋

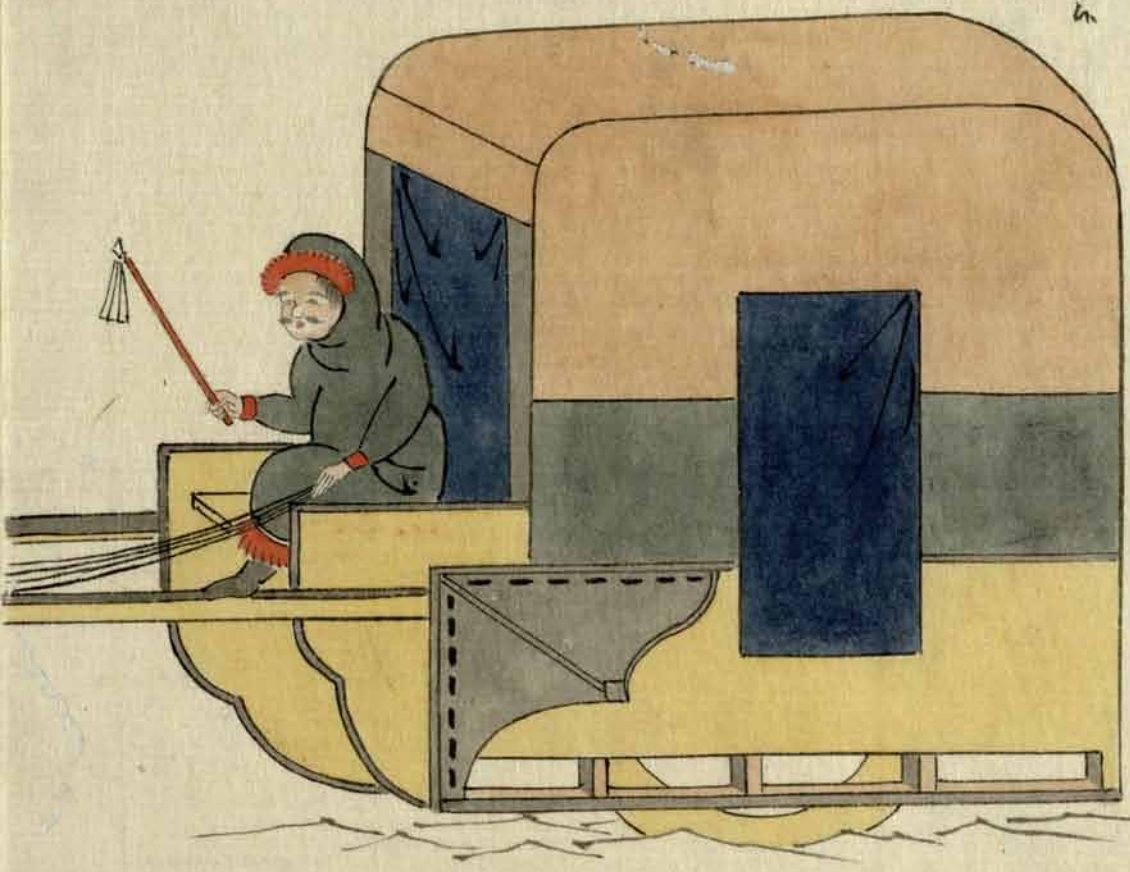
多くゆゑ此義を御厚かなる諸々を右者
雪車をもつて云ひ此所の上を通り仕候ゆゑ
ゆゑさぬ所にはるへを加へしをさんその方ハ
三角にして六七分の長サ
四足にはめ高さ此中に至てはなく云ふ
水の上を陸地なるを至らなる故此所
居たり甲斐中に但し往場の駅にも別に
其如斗り上陸仕又川の中所によりて非りこれ
丘のあくにあるなる通用もいふ事難り所に
ゆゑて其此場所とてを陸を引せ中に一体
陸路もオホーツカよりヤコーツカ迄者居中より

を格家宜ク遣て馬へ先キ事に後を附ケ置
校正の事は後者明りに書を遠ニ方まで
も呼えて主義にして先キの訳に従ふ様
引取ケ待受居て事遅滞なかれ
に仕合

雪車之圖

川沙の上人の案に
雪車を四丈志
馬に牽する図

車の右に標ッ
をけらる人ハ
馬奴(ムニ)なり皮
奴を付たる
鞍のかくなる
物をしてる
足をさくむ



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

もし既記せるかく十五人の者オホーツカを
三度に発足次は條を後年に第一番に
出立多く旅の道中記之左年は第二番
立津右ま各第三番に立之南人同様にて
ふくはれ夏此度中故別段にて様子ゝ承り
ゆ越左之通ニ少仲ゟ
寛政七年乙卯八月十八日
出立之順次オホーツカへ着
正月廿四日イルコーツカへ着　善六
寛政八丙辰年五月上旬　辰蔵
オホーツカ出同年　九右ま

十一月イルコーツカ〈着
同子七月三日オホーツカ
出立同十二月下旬イルコーツカ
〈着

銀三郎
茂次郎
左年
太十郎
伴右史
清蔵
己之助
吉郎治
市五郎
八三郎
民之助

津ちまゝ上ゟ才ホーツカ出立ニ御オロシヤ人宮料
壹人ニ拙者ハ咲廿七人ニ外ニ馬士（ムマカタ）ヤコーニ 馬
拾六七疋ニ而ニ乗り申ス辰七月三日才ホーツカ出
立日月廿九日ヤコーツカヘ着仕ル

一 道中宮の内ニ而ニ御ニ馬を休セ給ふ
所ニより御馬も仕ル

一 馬ハ飼料ハ外ニ無ク不仕ル所ニ草ハ
かつてくれ可申ス 盡ハ日本の通りニて人の家ニ
鞍ニ無馬ニ荷を付ル事仕かけハ格子の様子
ニ此仕ル（前ニ呂 例ノ） 荷ニ付ル者ハ諸ハ異食物ニて
いつ迄も牛ハ皮袋ニ入れ申ス

荷物ハ老話十二歳目程ニしハ荷ハ行くるの上ハ
は人をそふせかれバおよそ二十四人ハ
一 ヤコーツカ迄の為中山ニ多くハ宮根正なとより
高き所も可也ハ道ハ所多しかに定りハて通りハ
ふし以来ハ所も為つきたしハ先ニ立ハ馬ハ人へ
居ハてそりまゝ此ハ所ハ夏氣ニ多ハ人ハ処
山谷の間ニハ半日計りも多を流り此事ハ
是ハヤコーツカ迄ハ中にて為中ハ半ハ程の
所と見へ申ハ其ハ浮ニ多ハ求ハ又當ハ申ハ
小松立ハ所ハ人ハて其ハ中を押すけ通りハ
一 松ハ日本の松のめきハ皆ニ松ハて人ハ乙葉也

富士雲に大木おゐんにかしに二葉の松もかほに

一 山櫻以ほに一生不足とかほに川邊とは何とかしに哉
柳に似たる木かほとて春草の新さしてを誓りたる
ものとも見ん歯りかし

一 蛾は多くはしかの也 蛾は見かけかし

一 蚊は唐中黥しく以ほにて 形は大きくはしく
去ましく 枕中は出かほに 是の門乃ミ多く出
にて目も云しきこの○にわとの所多くふ ほとに
故るの毛なく篩のめくにさしてへこるあを
顔にあてにたる 往来往てイルコーツカ なぞ
にても山へのりへぞこれしは手のをかぶりも

中れ計故を人里に在れ程に申し

セイナカ図

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

蚊を防ぐ冠り

一 七月ニ至り此月中仙台の八九月比乃気候程ニ
覚へ申し
一 イルコツカ逗留の内市五郎儀種々乃病ニ煩
ひ候ニ付役所より醫師をまし療治いたし
くれ候へ共薬を呑せ又赤き草のみの如き
ものを給させ申し
拵させるに　營實(イバラノミ)なる物を
其後同所ニ有之候病院(ヒヨウイン)ニ移らせ薬用
ニ被遣させ候拙者ともにものゝ申候外ニ病人
二三十人も居り申候右市五郎もいつれも

出ゝ立し給ふて快りなせしかまし此所に滞留死を
少れ追ゝ義りにへ養生ふ相叶同所にて病死
仕よし

一 北平中上所乃中し内イルコーツ刀迄七百里も御座
と申候事ハ御座もオスコタと申所り候ハ同所に七
八間不とする地隔を御座ハ井戸とも申候事
記事ハ車仕をゝ事ハ其の水を汲ゝ上ゝ樋ゝ
通しして釜ゝ入りしかゝる者ハ一ハ塩に
乗り申し是山塩と申候とあらん上申 此事後其
諸國ゝ如山塩を用ひ申し此塩所とよ祭出れ
少ゝ出ハよし湖にて薬しに塩と何の替りも

此生無之候

一 ヤコーツカよりイルコーツカを弐千百里ゟ之所川
つゝ茂の所前之
伊尔歌都加
寛政八丙辰正月廿四日後之陽善六辰蔵三人
お様イルコーツカに着しまゝ迷年行の後所に死出
ゆれ日本通詞の者其の所に死在漂着以来
し次第お常ゝ也吟味お海奉行ゆとゞけ
町宿ゆれ飯料として一ヶ月に銅銭三百枚
ツゝお渡され右宿にて月々銅銭請名にて
賜ひ不仕出之申候

一 三人共一所に同宿仕候右所宿に暫時相居候
而程なく通詞役「トコロハ」者方へ轉出
門居仕候然に如其相義平吉人を別屋へ
お贈し申し又ことに義多情吉人「トコロコフ」方へお
移し其人の善六居義家居致し候事に候
いろく移贈仕り諸立のことの、案着ラ行ニ十一月
に至り先ち夫銀三郎友次郎先平右十郎五人
別居仕候并各中台三四人ゞ別に居申し候
十二月末津ち夫清藏正之郎吉次郎八三郎
民の郎六人着し都合十四人おそ給ひ申し候
上彼方にて何かお談り仕候趣にて皆々通詞

従の居宅を三棟ニ仕立内二棟を拙者ニ
貸し切り二棟家内之者住居仕合相勝候ハ
其屋ニ而川伊兵衛付属ニ而九郎右衛門殿承知仕候も
相済し上者別居住居願出候ニ付又何之話
呉くれ越ニ三間ニコライ宅とせトコロコフ
此宅と本所ニ二夕別ニ附ク相建居候ニ付段
され一ヶ年計り相渡し通り候ニ付段居候まことに様
自分借宅ニて取立為有頼い之旨無御座
并而支度二夕つれニ居借いたし住居
日々雇夫と相成候事也
六人之家ニ而相暮し候之年凡二十五枚

し宿貸し所に罷者

一 又其後當所その大商某と申その我ことを
滞留中厚く目かけ呉て事ありし故即ち右之
人の店門を宿貸ありしまゝ貸されしを
休しこと店門に二タ丁れ備置仕候又志つくし
ハ此にて別に店稽致せし者も居しに其年
津ち吏員都へ出さしこと居とし引つき右之店
に罷者

一 居十一月左平に當所にて宿しこと家連れ
しあり此ニ乃ヲ恵ニ役所へ引かけ西桂本行の
おれ百生さんに罷者に如こと前に居合の人

本國の人より脊低く眼の色も黒く一種の
根子暫りにて日本言葉をていつれも五年
仕に併鬻采は屋はり彼国の姿に少しに故
ふ審にそれしてこそ許にはいかに此方にて少しに
やとる事也を其人の言ふ所審ハ此也と事に
此少及ひも此ハ私事ハ日本伊勢国の所蔵と
申しものにて先年漂流せし私所出たる史と申す
と一同に此國へ来りこそ後出たる史ハ帰国
此事し某ハ此地に残り居る者に少しにとも申し故
始て根子もおろかもひよりて左年申し此
私ともハ去ハ五年漂流せしに私ハ此の事

なりけれ勢別の光を更に申人オロシヤ祇ニる
惠寿の方より送られ為朝殺されたるを申
噂を信ぜ深川にて事を取り事明白に此事
一通りに取りはまとる某ホ居候らはしにて
なしハ一向事中にて一し誰に不思義
の面會なくはなと申はあ候ニ乃御事を
折へ申達に候てお所をさる郡新義門居ニる
同人宅に連れ来りは二家門妻一も連せ申は
右妻何か接移るしは行を言葉通し申れ
人かうの事に更よりと人着殺居義年ホ信居
の所へ集りせはす

新ゝ殺ゝ奪れ名ハ「コロライ。ハイトルイチコロ」ニテ
ゲノとゆゑ日本文学師道の後お新去地の学問
所に日々出新日本学事習の師道殺ゆゑ当
時童子の事ゆゑ六人ならば諸国捨校乃発行ひ
れゆゑ漂流人は地々至着の後は右をうし
用向をもゆゑれ故々やかゝ増して百二十
枚となる
何つとも都府に発ゝ所ゆゑ身係をもゆゑ用
向お新ゆゑ右し新功て又加増し三百四十
枚ゆゑれ国王より装束雅紙冠帽を給
ひゆゑ

ボーホローチクといふ官に入裏東ハ此度役節
の着せる様に似たる星をつけたるものゝ
且右之度職にあらしかは彰蠟燭にもとより
相渡れ悴へハ銀五十枚ツヽ年々給ハ此悴当
寅年十二三才なる事
彰義ハ当年四十二三才なる事 妻の
名ニレウェヤくムジヘイオナ男子弟人女子壱人
生 当不再当中 高死次 後妻娶とる名ハカチリナヽ
アキフモオナ年三十計とみへ
一 彰義ハ日本学ハいろはより能名字位
出来に柳子にかなれ乃ちオロニヤ言葉并語の

事もよく覚へ以越ふて又但以拙合す又以遊宦
新い書ニ外の出物ハ彼方の文法ハ自在
ハ自在ニ認メ居ハ様子之

一 日本通詞役者 エコロイワノチドト
コロコフトハ此人始ち所内村方ニ為間所役
検地別を勤て七十五枚此宛行ひ来りしか
先年皆為光ち夫ハ為送り来る事越し時
日本通詞役ニ申付候れたり是ハ五六十年
ニ加ハ以前南部田名部郡の邊より漂流
此地乃永住ニ来れ事之
イルコーツカノ墓所ハ外内徳を情ニ敗れとる

石塔は又享保十年干滅年何ことに彫りたる
日本宗教石塔もありしかの教にやはしに光ちまか
記に田名部郡の辺り佐井村久助といふ者は
亦拘るに南部奥之介竹内德名修子祝延享某
の年漂流して彼地に留りしとて和久助
と居じんは此人数の因なる事しし外国の実記
は別にあれ
この人に志るうひ十二日来より拾七日来ける日本
詞を習ひし事は其後打捨置は何も少々
覺居ける故通詞に申復されて光ちまの送り
祝に乗り組去に子年豊なとも来りし也此里

又日本種子にて右所通来り子もこれを祝ニ云々
松前に来ると名をは「ヘリアイチ」と云し
よし　右光ち夫滞なく送り庵ヶ諸用に無に
ニ付帰国の上右の動(キン)功によりて銀四百枚の高
に中付ゝ候に依て當時とても引ゆき日本
通詞役にて名仕に者なとも召し猶手向お
應にはし居にあり
女帝死去乃得此紙重添を方中途ニ滞り
ひ来し出来し三ヶ年の間不無なりに追ニ
三年分を取ニ手ニ百枚落名しといふ噂ゆ
しよしあり

日本詞抄認見し書物見し是を以合る言
物をいつれへも意對しゆれは中程も不相て
矣しかゝきまるも之一ツ此ゆ中にを此ゝ事より
多くミうけて挨拶されは再答にはさしまへ
に斗りなりし物ニ其日本人乃中事ヲ出
尚ゆ中事も此仕に一十ヶ年習ひにて出年
と中年も可仕に無し事新義にて爲に合
故とまゝなり
ゑゝ日本詞八年稽古行しにと中者にも
出合意對仕ても一向出矣しかゝ
當訓に家數三千軒程あり奉行を第にて

二三人ありと雪西東國より三四年並交代次
下役の者并足煙子八百人程あり所を蒙といふ
無きものをゴロシンテといふ其人は寺八十三ケ
寺は其無く家作は石造りなり木造り也交
る都居己東南の方に當り山は西が北に迫りこの
[illegible]河は川を廣クヤコーツカの方へ流る此川
極寒の内は氷此厚サ二三尺程ともいふ之三
月初が氷とけかゝるは時々は川幅かなり氣
蒸しとなるこそやの立はめくにあり人の面も
つんくとかゝ程なり土地乃廣サハ凡四里程其
此如きを本國の形勢へトルブルクを七千里

寶ハ六千七百里ありといふ

唐山界迄五百里從東北端末北地カミシヤーツカ

我州東の諸嶋よりハ北にあたりオロシヤ

順國地つゞきに相當なり

まて六千三百里從此里によし此惣別都の方

なるトボリツカ及ひ加山（ガサン）と云所東西の方ブラー

ツケロヤコーツカロオホーツカロカモシヤーツカホ

の諸地に至る迄數千里此間の惣名をシビリ

止白里とかしび其惣別ハ三相くこと家基久

夏氣とかしふ年間も五六七月乃至斗

暖氣ともかし亀くしび一生中に此イルコーツカ

そかゝるハかゝ南に寄に地故志いとくの習をかくの
めく夏とも可申氣候此者に極子に見ゆ如當家
近き此郷中殺千里の習をブラーツケとゆに見ハ
オロシア出領とハお来りゆゑ見おより古(ゲツキ)君の種
族にてゝ中に此人とハ眼の色黒く身材も低
くオロシヤの人物とハ大に遠ひゆにオロシヤ
ア人追くさの色古に来り古締り所に後ハ所を
ともオロシア雅(ゲネ)の人多くお来住居仕中に事
此所なとは皆オロシア種の人斗り住居仕
但市中にハ他國の商人も逗留ありて此所
人ニハ近郷か入り来りに古着の者を皆つゝし

ツケと呼ひ申しフラーツケ此人は甚タ野鄙に
御坐に故い意しきられ申しを言語も昔より梨
云来りに云葉をきひ宗旨もヲロシア一流乃
宗派ゆゑ此坐なくにを衣服飲食も遠ひ申し
併近来ハオロシア言葉も用ひきたりに程も
法ひ衣類も麁紗此類を相用ひ申し
當所に拾四人の者八ケ年逗留ニ於ケ来の年
四ケ通目にて吉次郎病死後十三人となり申し
夫故物かたりに事長々前に住に依て頼ゆ
に後に来りにて九々お認メ申に此地に事を
おおきしハ想國の風俗も推しおかり申に

義と相見ゆるなり

街衢居室第

町小路並に人家之事

此地家居之有る所日里程にして

一里塚ゆゑ所に是を知れり彼國の里数なり

以下是に同じ

家数三千軒程ある町割は横竪に有町の写

くに寺有別に町の名といふものを以次第に名を

以て住居を尋ぬる所幅狭き有七八間廣き有

車三ツ方に通じる如も有二家造りは石屋も

木造も有一生中石屋は少しこれ二階屋

たりも十三ヶ寺の寺にも皆石造りの路に屋敷
構へ此廣狹は分限によるに甚家の大小とも小
住居し書にはは菜園あるも菜蔬無甚烟草
等を作り高呂吏故一軒屋敷にても甚々廣き
かゝにて家の惣数に合せては町小路も廣き
なり奥の町は別にあるまで青影叶り賣者
居もなしびたるに又豕羊の類は市中の小店
にて賣牛町へも何れにも 下に 一躰ち地に
惣迫りは有之し歳多る所有り只恒町病院
鍛冶屋なとは町よりも半里斗もなれ
あるなり家様ともは路に乃住居と

あきなひ賣買の不自別之賣物斗ある不ハ
右店小店と分りて智住居の出置之量音の門
を加へ其代當頭出張して商ひしむるハ當
人かけ行く説め亀之江戸ハ柳原旧日市の
越て大小乃店分る之大店ハ石作り小店ハ木
作りとて店ハ有二間程の間簷下の所ハ
通路となる所なり

一 石作りし家を先想かこひの間数をうち其
廻り并に円し住居乃仕切をなす所置さ通り
小土庵をもて置きともいふへき不を除く
不ゆまて其円小石をはめなく置て寄りて見

こゝに小さつくんのめきおを流しかくのめく次
ゝ事数篇の存地つゝ座く程にあるし
時に切り石をまたるゝ此半面をかゝるはくを
様へニツツゝあらへつゝれよさ方ハ外面に
家の内面に向けこゝ多石の間へハ小石表
新をつめ事寄かきの斯のめく限くに石二ツ
死をきく（カサネ）築とゝ表程にをいきけし時
其の武ツ合せの石程なる幅と廣さ石の面も
尾を限くあさるゝ石も尾も其ゝ生ね
ちの間くをぞイツウエしスカといふ石灰
乃ちくきおを垂事下尾乃上面と上尾

乃下面とを粘(ネバ)し若けるを

イツウヱースカ　水を和しとくれハ粘ふれの生

さらしモ乃なる別に詳ふ次

斯のめくふ積ミあけ定まれる高さとなる次

物二階ニなれ一所ハ長サ大丸たをもたしなるへ

ミ上ニ板をもたり又丸たをなるへさき置くを

右の石灰ふの物にて塗るかゝ先ハ上ニ左を

さ入斗盛又ミ上を板にしまるなりさて

内住居ハ別席仕切くの所ニ無ふりし藥

きさてのめくふしく藥石乃焼出まるへ

むこと石こまる○目の別に隔てをなる法をて

長さのへ横をぬきのかくに生門を通し
生左右をくさびにるかゝめたるに生門席の
仕切ハ皇ニ頃事好ニ仰セ前後左右人ニの
御手ニつける故事男もあるに母屋相へ生尾
を垂りて板斗りまゝに

生都し方ハ屋相へ尾か垂ニ付地ニ生
房相ニ垂尾ニ繋仕事ニ頃といふり

想殿右しかく仕り立門外ニ生しつくいを築り
ゑりまゝ心なる塗屋造りとなるに生ふさ所ニ
小明り居り此事をこゝふく是へハ板磧子を
仕ひ見るものに又重ニ母障子も有

志上下とも無板處にしゐ人この住居所ハ
二階之戸ハ大抵廻し戸但し大家ハ分ん出ん
ゑし或ハせしも是下と居ハ煮炊する
竈ニ其餘は雜用を弁する所とハ又官家
もあ様

焚出し所ハ二ムしやとて別居かまふる
もあり

下居と表門口とは皆廻し戸なり

一 木造りの家ハ大臺の所をよしかゝる大丸ハ
井桁ハ組ミあけ多るそのくまのは方ハ
丸ハ乃ニ重ゆめ乃所下とする丸ハ上乃方

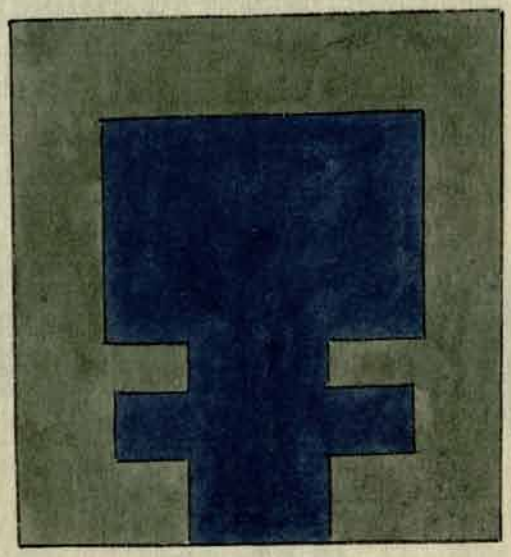
小長ク溝を立て高上ニ木ニ丸ニをこけて
くひ合せなし以来重もくかさ祢あけ定
まる高さとし出来より此石にて円かな
白土を塗る事石屋ニ同し井桁ニ組あけ
さる廓(カト)くハ四隅ニ出て居るも相建ニ作る
家ハ絶高さとしあ各ニ家の円にも成不
も一万くにて隅の石にヘイチ灯といふあれ
役(モウケテ)てこれ作り方ハまつ下地に家尾をなしく
四面の円一方ニ出を焚て竈口を云ふ
尾くにし三面より石にて築上ケまつくい
にてぬ里かゝ見これ万に拵ひ高大小を

あれも大抵横一尺竪も尺半程に其烟出し
ハ屋根の上へ取あるべしに高さ三四尺計に
出し口を細長く付きるものに竈口従新ほ
入れ焚きて上の煙出しより火焼を高へ出
さらしに其煙り出しの中人のえてせんの底
なとの所に烟を止める蓋を右乃大煙
を出し拂しに程合何りなきの蓋をして
立れ用る煙をかくめ其灯乃内の薪も燃へ
仕迫つて即焚落しをもきれに其のけ
前れ竈口を付きて上れ煙出しの口もそれを
しる上と前も仕閉ち塞(つかり)く大火を

焦しあるゝ後其めし煙りを止め内ニ火氣
持つゝ過れ故温蒸れ年灯の外へ之れ甚
家内坐處の内に涌る事有の外温暖なる
所ハ灯ハ古地之國故に家内ハ有あるゝ
窓中ハ暖氣なく志むるゝ事ハ設りる
之のゝ坐處ハ此に如此なれ故に家之内甚
何事ニ而事儒半一枚に所ハ事ハ絡ニ手業
なとなし居る去りなりしなくとも古かりに
なる火氣に遅くる事所りれいこと
見に古同くゝ氣も遅くなる如此
也とも

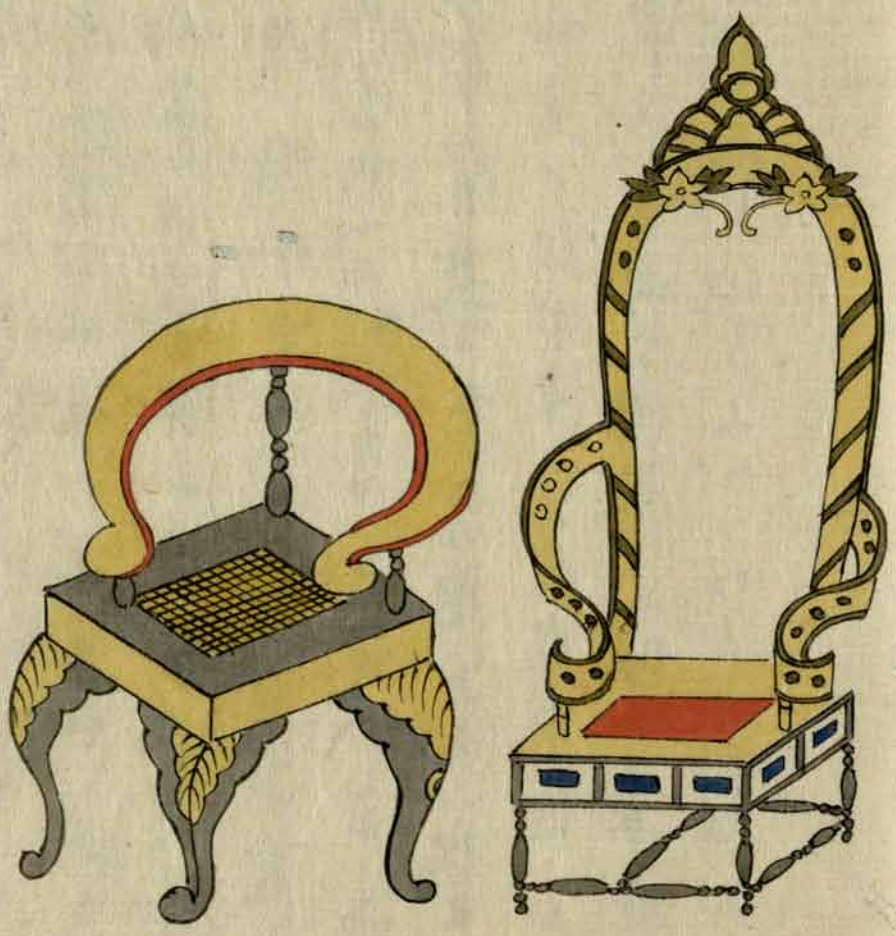
ベイナの下地

ベイナ



一 家内男女とるに掃子にかゝまて居る也

故に座敷者中に數々者椅子をあらし置を
客まへ出るも食事まゝに飯墨を大小とも



い詰くあり

一 上し間の高き所に佛の類拭ならへたり

一 鄙房ハ蔭ニ成る一所にて外床にて裀褥 絨

置枕ともとりはめにして有方の方にて暖

簾をうけ見一ぬよふにしてあるなり其所

具ハいろくあり 形めし 皮の蒲 其

表裏 両面内一ハ鳥 其毛をの並ニ用ある

なるなるものなり 是ハ敷蒲團なり 枕も右の

如くにし 其と詠れよふに其とるに物なり

是ハいろくも重ねて用 枕とするなり 上より着る

ことのをるふとんに似る所ハいろくの物にて用

化る精粗さゆゑなり

一 厠は二階にあり片陰に囲ふ内のまゝ板に土布
ふ ○ 如是に穴をあけ並後の穴のところへ
尾を落す用を便ゆる上にすして下る交
筒あり高下の溷に落て流るゝ也して
此土地にては耕作乃ち高しに使ふといふ
なきを棄り次第に云ふ也 但し稲氣を
避るとして其下を通りへ石灰をぬりかゝる
なるを

一 倉廩は石造りに外の作り方と格外替る
なし 但し戸前なとを丈夫にするいふまて

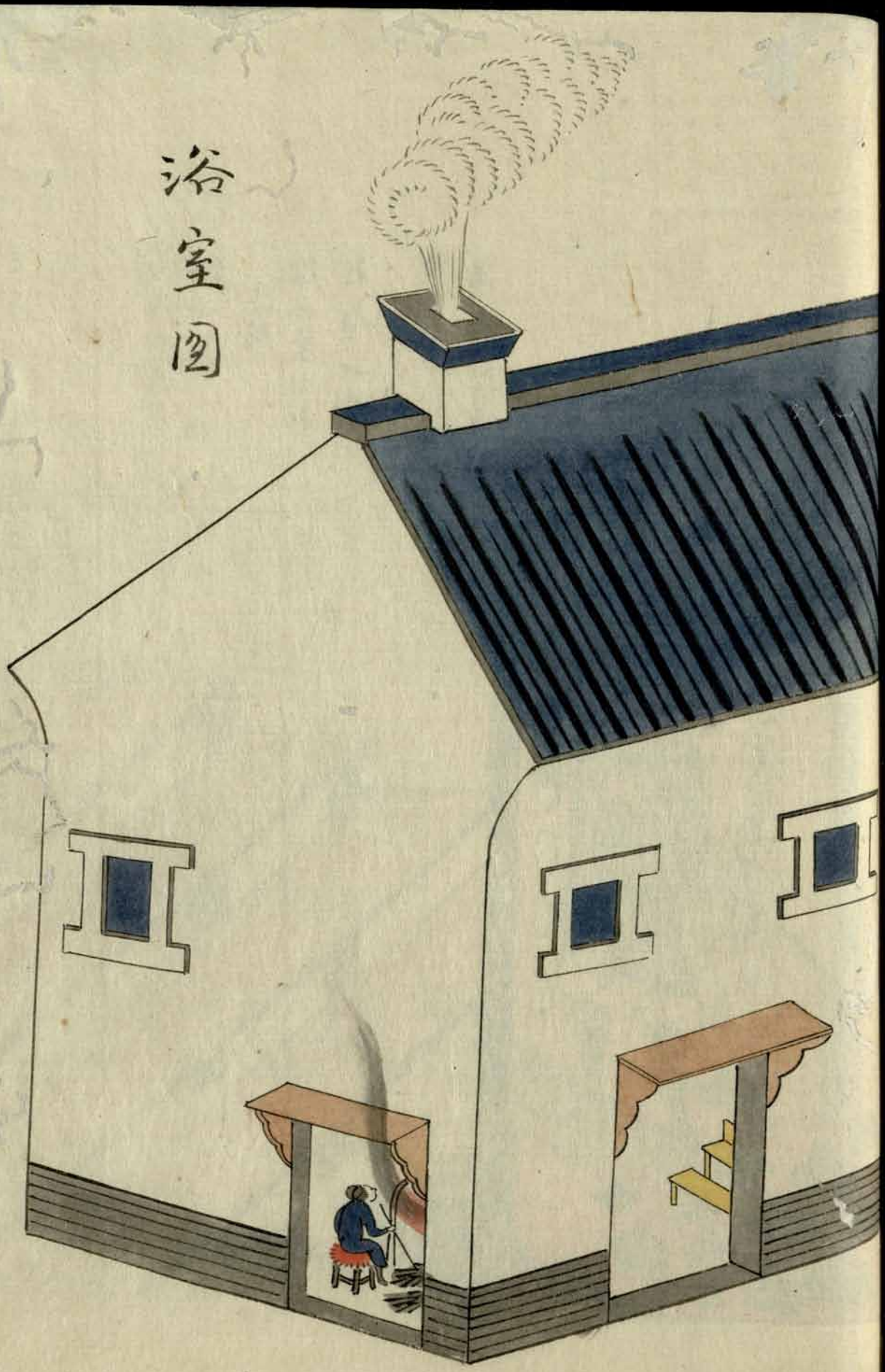
之二分内のうち穴蔵多し是ハ多クハ物ヲ貯
ふる為ニ設ク多ハ喫ニ夏ハ涼しき故ニ物
まいらぬまぬさるゝ多大二分ニても必ス小き穴蔵ハ
夏の内関数又ハ雪菜乃影を貯ふる内法
涼なるゆへ食物損敗せる事なし又夏と
ても川ニ付解ニ残りの水ありまた穴蔵へのれても
腐敗ゑえなしと思ふ物ヲ右の水を川より
ゑり其穴蔵の迫りに積むなり此法物
まて外を囲む故ニ損せらるゝなし
井ハ深ク鑿り井かりとを二十底分上迫墨ニ
あけるゝ其深鉤瓶なる菜ニハ川ハをそて

煎さて

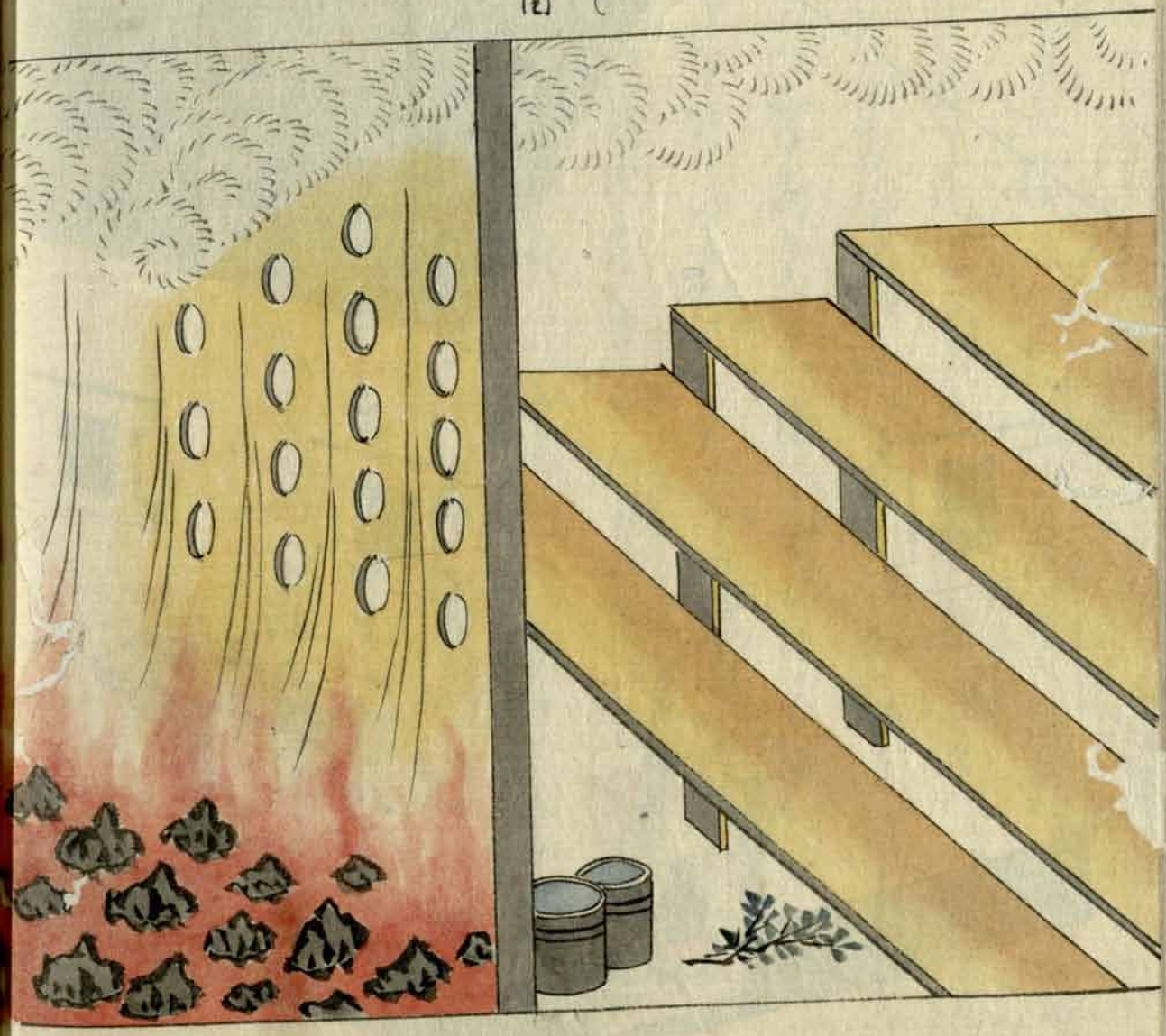
一 風呂ハ可ら風呂ニて路々の家ニあり但し住居ハ離ハ
高ク風呂屋を建其仕方ハ円ニ石を積ニ並て其
下より火我焚キ其の石ヲ焼ス焼ル時是ハ
冷ク水をきゝきおかくる之是ニよりて湯煙ヲ盡ク
小立上りて其内ニ充満次ニ時風呂入口のさし我
閉ツさて人ニの入浴ニ至る而ハ其の恵昭ハ板
仕切ニて是を満つる其つる其焚湯の事ハ
小蒸し来る之板内ハ以来事も棚を設く
其棚此上ハ人ハ裸ニ成りて其此湯事ニて
躰を蒸次之能ク垢もよれ 其外も

なるをもつて様の小持茶年のまゝなれハ来年の常
乃ゆゑにして其門ニおく人ニ是をとつて自然
のしたをおつに垢能ク落る之小桶に塩あらハ入れ
置て火事あるに塩へ兼かゝれハおく能に
さまをおくきかゝるなり。昆陽をきひ又入る
なり一ヶ月四度斗よりなるされハオレキリセン
やてゝ二日前根にハかなし次ゐてゝ家内中身ヲ
清メるなり市中に鍼湯もあつかれ此通りて
但大勢入込有ゝて廣くかまへたるとなり
入浴しまする者ハ久しく内ニ居かゝし

浴室図



浴する者のやる
桃の図
小桶
櫻の葉付れ
枝箒れ図
焼名に水をそゝきて
湯乗を盃次図



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM